

ようというものでした。ですから、これはすでにそのエッセーのなかで書いたことでもありますが、ホロコーストがあったがために、ユダヤ人は、その内実はさておき、とにかく自分自身の国家をもたなくてはならないのだと、イスラエルのユダヤ人やあるいはアメリカに住むユダヤ人もしばしば言いがちです。その場合、その国家がどのようなものなのか、そこでユダヤ人が何をしているのか、どのように振る舞っているのかは、さほど関心をはらわれないのです。実際には、そうした事柄が、ユダヤ人とユダヤ民族の生存にとって重要な試金石になっているのです。

しかし、もちろんこれだけでは説明として不十分だと思います。たしかにホロコーストが、イスラエル国家の行為を正当化するために利用されてきたのは事実です。まだ私が幼い頃や若い頃には、イスラエルにいる友人らからホロコーストについて何か聞くことなどめったにありませんでしたし、ときに耳にすることがあったとしても、ホロコーストの犠牲者や生き残りの人びとは蔑視の対象にされてきました。彼らは弱くて、無抵抗で、殺されるがままにされていたとみなされていて、社会の恥と言われていたのです。もちろんホロコーストの生き残りの子どもとして私はそのような考え方などまったく共有などできませんでしたので、こうした言い方にはたいへんに困惑させられました。しかも、そのホロコーストが、イスラエル国家がパレスチナ人を弾圧する政策を正当化するのに利用されるようになっていくわけです。このような矛盾したホロコースト利用、あるいはホロコーストの見方は、私にとってはたいへんに攻撃的なものに思えました。同じ事柄について考え方や感じ方が人それ

ぞれなのは当然でしょう。ところが、大半のユダヤ人が、マジョリティと言ってもいいと思いますが、ひじょうに強固に、一方でホロコーストをユダヤ人国家の必要性を正当化すると同時に、他方で戦後のイスラエルでは犠牲者や生き残りを侮蔑してきたわけです。私の親族の経験を振り返っても、私の知っているホロコースト生存者を見ても、つねに社会から周辺の扱われ、与えられるべき敬意も尊厳も社会から与えられていないのです。彼らの存在が象徴しているとされるのは、過去、つまりイスラエル建国前のユダヤ性、弱さ、後進性、伝統的生活、そして抑圧されるマイノリティ、そういったものなのです。いま現在のイスラエル国家のなかでも、ホロコースト生存者たちは市民としての平等な権利を与えられてないと思うときすらあります。イスラエルには多くの内部的な矛盾が存在しており、単純な話など一つもなく、この問題についてはすでにいくつかの本が書かれています。

さて、こうしたことと深く関係するのが、言語の問題だと思っています。これは徐さんが冒頭の「応答」で語られたことにも繋がっています。私の第一言語はイディッシュ語なのですが、このイディッシュ語というのは、現在イスラエルでは使われていない言語です。というのも、これは弱者の言語だとされたからです。

徐京植

ここまでたいへん重要なお話がいくつも出てきました。その中で「ホーム」ということと「言語」、

ホロコースト

から ガザへ

サラ・ロイ Sara Roy

パレスチナの政治経済学

岡真理 + 小田切拓 + 早尾貴紀 編訳



戸塚 ☎862-9411

横浜市立図書館



2043764252

青土社